

平清水焼の思い出

宇敷 辰男

杜の都仙台から県境の笹谷峠ささやを越え山形市内に入ったところに「平清水焼」ひらしみずやき陶芸の里がある。

昭和の終り、妻が仲良しグループで初めて訪れ「七右工門窯」しちえもんがまの焼物教室で平皿を製作した。薄手で楕円形の縁をつまみ上げた形で、窯元の庭のふきの葉を粘土に押し当て模様を画き、薄緑色の釉薬で仕上げた大皿で、ビギナーズブックの出来栄であった。

ホームパーティーで手料理を盛り付ける皿として活躍したので、平清水焼が良く話題に上り、平成に入って義父母との東北旅行でも立ち寄るお気に入りの陶芸の里になった。

妻と平成十年に訪ねた時、私も焼物に挑戦した。

平清水焼の原料は石英粗面岩せまいそめんがんが風化した丸山陶石まるやまどうせいが原土である。窯元裏手の千歳山から無尽蔵に採れる鉄分の多い硬い陶石で、その成分が陶器と磁器それぞれになることから両方の焼き物が作られている。

その粘土を千八百円で一詰手にした。妻が平皿だったので私はごはん茶碗を作った。円筒形にした粘土を手ろくろの中心に置き、中央に親指を差し込み両手で広げながら、手回りで成型していった。

作品を窯元が本焼きし荷造送料千円で発送してくれた。心待ちにして一ヶ月、届いた梱包を開けてガッカリ。分厚くて無骨で持ち難くタダ重いだけですぐに処分し、改めて妻の大皿に敬意を表した。

それから十三年後の三月十一日、東日本大震災が襲ってきた。練馬区でマンションの十一階は本棚が倒れて壊れ、倒れた筆筒に穴が開き、固定していた食器棚から中身が全部飛び出して、家の食器の八割方が壊れ、妻の大皿も割れてしまった。

いま平清水焼はどうなっているだろう。インターネットで調べてみた。窯元は五代目から七代目になり、山形で一番古い焼物の伝統を受け継ぎ、粘土一詰は二千八百円になっていたが体験教室は続いていた。「セールスポイントはやはり陶芸教室です」という窯主の言葉通り、話のネタになる思い出である。